台大日本語文研究第 5 期
2003 年 12 月，頁 21～50

秋成在＜白峯＞中的翻改技巧及排儒黜佛論

趙 姬玉*

摘 要

日本志怪小說的傑作《雨月物語》，爲江戶文学巨擘上田秋成以「翻案」（仿作）中日古典文學的手法寫成。本論文是以《雨月物語》的首篇作品〈白峯〉爲探討對象。

〈白峯〉的內容是描述被迫遜位的悲劇天子崇德上皇化爲厲鬼出現於原本是武士後來出家的西行法師面前，爲了將自己生前發動的叛亂事件正當化，針對儒家的禪讓・篡位思想，和西行法師在黑夜的深山裏進行辯論的故事。根據兩人辯論的內容，學者之間傾向於將本篇視爲日本「國學者」上田秋成的排儒黜佛論。

本論文首先比較〈白峯〉及其典據，繼之闡述作品主題，探討了一般所謂的秋成的排儒黜佛論，並提示不同的觀點。

關鍵詞: 上田秋成、白峯、西行、崇德上皇、排儒黜佛論

臺灣大學學術期刊資料庫

* 臺灣大學日本語文學系教授

A Study on Ueda-akinari's Adapting Technique and Discriminatory Attitude Against Confucianism-Buddhism in *Siramine*

Chao, Chi-yu*

Abstract

This dissertation is to discuss the first chapter of *Ugetsu-monogatari*, one of Ueda-akinari's outstanding collections of weird and mysterious stories in Japan.

Ugetsu-monogatari consists of nine stories, and the first story is *Siramine*. It tells the tragic story of Sutoku-joko, an emperor forced to abdicate, whose malicious spirit argues with Saigyo-hosi about "usurping the throne" thoughts of Confucianism, in order to legitimate the rebellion he arose when alive. According to the content of their debate, most scholars tend to regard this story as Ueda-akinari's discriminatory attitude against Confucianism-Buddhism; the author will discuss this unfriendly criticism in this chapter.

In this dissertation, the author first compares *Siramine* with its originals, discusses its main points, the so-called discriminatory attitude against Confucianism-Buddhism, and gives hints of opposite viewpoints.

Key words: Ueda-akinari, *Siramine,* Saigyo, Sutoku-joko, discriminatory attitude against Confucianism-Buddhism

* Professor of the Department of Japanese Language and Literature, National Taiwan University

臺灣大學學術期刊資料庫

「白峯」における秋成の翻案手法及びその儒仏放伐論

趙 姫玉*

要　旨

『雨月物語』は上田秋成が中日両国の古典文芸を翻案して書いた作品である。本論文では、日本怪異文学作品の白眉とされる『雨月物語』の巻頭を飾った「白峯」を考察対象としている。

「白峯」は、無理に退位させられた悲劇の天子崇徳上皇の怨霊が凄い形相で、かつては武士で後に出家した西行法師の前に現れ、自分が過去に起こした反乱を正当化するために儒教の禅譲・簒立説を持ち出して、西行と深い闇の山奥で議論を交わした物語である。議論の内容に基づいて、この一篇を国学者である作者の上田秋成の儒教仏教放伐論と見なす傾向が研究者の間に見られる。

拙論では、まず「白峯」とその拠り所を比較し、『雨月物語』における「白峯」の主題、位置づけを試みた。それからいわゆる秋成の儒仏放伐論に検討を加え、違った観点を提示した。

キーワード：上田秋成、「白峯」、西行、崇徳上皇、儒仏放伐論

臺灣大學學術期刊資料庫

* 台湾大学日本語文学系教授

「白峯」における秋成の翻案手法及びその儒仏放伐論

趙 姫玉

一、初めに

上田秋成の『世間妾形気』の巻末広告には、浮世草子『西行はなし歌枕染風呂敷』という本の近刊が予告されていたが、今日に至ってもその存在が確認されていないままである。しかし、この出版予告を一つの根拠に、西行を主要登場人物とし、西行の諸国行脚の見聞などを題材とした作品、もっと具体的に言えば、権力への執念で魔道に落ちた悲劇的な権力者崇徳上皇の亡霊が諸国遍歴の僧侶、つまり西行と思われる人物と激しく議論し、その言葉で「治承の乱」「寿永の乱」などの歴史事件を予言し、立証したということを内容とした「白峯」について、その前身は『西行はなし歌枕染風呂敷』ではないかと推定されている。なお、秋成の晩年の作品『藤簍冊子』の中の「月の前」でも西行を登場させている。『雨月物語』九篇のうち、書き出しの一章となっている「白峯」がもし『西行はなし歌枕染風呂敷』から生まれたものだとすれば、この作品には秋成の創意、工夫ないし意気込みが端的に現われている、という鵜月洋氏の指摘はかなり妥当なもののように思われる[1]。

「白峯」については、よりどころの考証の外に、『雨月物語』諸篇のうち最初に書き上げられたものだとか、「白峯」に見られる秋成の「神国観」と賀茂真淵の『国意考』の関係はどうだとか、「白峯」に現われる秋成の人間観、思想観、歴史観はどんなものだったとか、秋成が「白峯」を執筆したのは作品成立前後の宝暦 13 年に崇徳院六百年祭が行われたからだとか、いろいろな角度から考察されてきた。拙論では焦点を（１）典拠、（２）秋成の表現手法、（３）主題、（４）

[1] 鵜月洋『雨月物語評釈』（角川書店、1969 年 3 月）27－29 頁。

臺灣大學學術期刊資料庫

作品に反映した秋成の思想にしぼり、順を追って考察していくことにする。

二、典拠に関して

「白峯」を除いて『雨月物語』の諸篇はいずれも中国の作品の焼き直しである、とよく言われているように、『雨月物語』諸篇のうち、ただ一篇、中国小説から影響を受けていない作品といわれてきた「白峯」は、やはり翻案作品と言えるもので、数多くの和漢典籍からいろいろな内容を引用していることは、すでに明らかになっている。以下、「白峯」の典拠について、いくつか問題点を取り上げることにする。

「白峯」の典拠に関しては、日本関係のものとして、『撰集抄』巻一の「新院御墓白峯のこと」と巻二の「花林院永玄僧正のこと」、真淵の『国意考』、『保元物語』の「新院御墓経沈附崩御の事」、『山家集』、『玉すだれ』巻一の「天満宮通夜物語」、『源氏物語』の「須磨」、『源平盛衰記』の「讃岐院の事」、『太平記』の「宮方の怨霊六本杉に会いする事附医師評定の事」と「雲景未来記」、『国府台戦記』、『一夜船』、謡曲「松山天狗」、『本朝神社考』など、挙げられている典拠はかなり多い。『国意考』は別として、そのほとんどはすでに定説になっているので、ここでは贅言しない。その中で、物語としては「抽象的な論議の交わされる例がない」という指摘は、この作品の溯源的研究の上で重要なポイントを示唆している[2]。つまり、抽象的な議論を物語の中に織り込むという構成の仕方は、それまでの日本の文芸作品にはその先例を見ないので、秋成の独創でなければ、中国物からの影響によるものと考えられるということである。これを念頭に調べていくと、まず、二人の人物がある事柄について難じたり問い詰めたりするという構成パターンを有するものとしては、都賀庭鐘の『英草紙』の「後醍醐の帝三たび藤房の諫を折く話」とその典

[2] 重友毅「翻訳翻案文学としての近世小説－特に怪談ものを中心として－」(『国語と国文学』第 15 巻第 4 号、1938 年 4 月)。

臺灣大學學術期刊資料庫

拠であるの『警世通言』の「王安石三難蘇學士」が挙げられる。次に、後半の未来を予言する部分については、同じ『英草紙』の「紀任重陰司に至り滞獄を断くる話」とその典拠である『古今小説』の「鬧陰司司馬貌斷獄」が挙げられる。そして、知識的言説の内容のよりどころとしては、『孟子』、『詩経』と『五雑俎』が挙げられる。そのほかに、『剪燈新話』の「永州野廟記」と「天台訪隠録」も典拠と考えられる。

しかし、上に挙げた中日両方の文芸作品をすべて「白峯」の典拠と認めるとしても、いったい秋成は直接に中国の典拠に拠ったのか、それとも間接に日本の翻案物あるいは翻訳物から借用したのか、という問題が残され、さらに詳しく調べる必要がある。和書の典拠については、すでに諸先学の考察によってかなり明らかにされ、ほとんど異論を挟む余地がないように思われる。したがって、ここでは、秋成の漢文学の素養を知る手がかりの一つとして、「白峯」と中国の典籍の関係にかかわる、いくつかの用語のよりどころを検討してみたい。

周知のように、「白峯」は秋成が中世の動乱にまつわる歴史史実と俗説伝承を通じて、自分の歴史観と思想観を議論という形式で提示したものとされている。議論の内容が秋成の思想観、国家観を反映しているということで、その中の用語の出所についてかなり詳しい考察がなされてきた。しかし、まだ問題がすべて解決されたとは言えない。たとえば、秋成が「白峯」を構成する際に、『撰集抄』を利用したことはすでに明らかにされているが[3]、内容がそれぞれ違っている『撰集抄』の諸版本のどれによったかについてはまだ定説を見ない。それはさておき、以下、取り上げるのは、「且詩にもいはざるや、兄弟牆に鬩ぐとも外の侮りを禦げよ」という文の典拠である。

この文の典拠については、中村幸彦氏の『雨月物語』本文に関す

[3]鵜月洋氏の解説（『雨月物語評釈』、角川書店、34頁）によると、典拠は「貞享四丁卯暦仲夏月摂城書林河内屋善兵衛」という奥付のある『西行撰集抄』である。

臺灣大學學術期刊資料庫

る注解をはじめ、従来の説として『詩経』の「小雅常棣篇」の「兄弟鬩於牆、外禦其務」がその原拠とされている。ところが、周の左丘明が編纂した『国語』の「周語」にも、「周文王之詩曰、『兄弟鬩於牆、外禦其侮、若是、則鬩為内侮、雖鬩不敗親也』」というかなり内容の類似した記載が見られる。前者の箋注に「務、侮也」とあるから、両者の意味が全く同じであることはいうまでもない。『雨月物語』のこの一句は、まず「且詩にもいはざるや」とあり、この「詩」というのは、一般に『詩経』のことと考えられる。『詩経』は『国語』よりも早くでき、日本人によく知られているので、通説のように、この一句は『詩経』によったと見るのは、至極当然である。

しかし、もし秋成が『詩経』から直接引用したとした場合、なぜわざわざ「務」という字を「侮」に変えたのか、という疑問が生じる。とすれば、むしろ「侮」の字を使った『国語』から引用した可能性が高いように思われる。秋成の誤用あるいは衒学的な理由でもなければ、秋成が参考にしたのは『詩経』ではなく、『国語』であるかもしれない。つまり、「且詩にもいはざるや」の「詩」というのは、『詩経』ではなく、周文王の詩をさすのであろう。『漢籍解題』で「歴代の研経家が春秋を攻むるに必読の書」とされる『国語』は、いつごろ日本に舶来したか明らかではないが、『江戸時代書林出版書籍目録集成二』の「元禄十二年刊新版増補書籍目録」には、すでに左丘明の『国語』21 巻が載っている[4]。したがって、秋成が『国語』を読んだ可能性もないと言えない。

なお、前述したように、渡辺操（こと渡辺蒙庵）の『国語解刪補』二巻二冊が刊行されたのは、崇徳院六百年祭が行われた宝暦１３年ということもあるので[5]、たとえ秋成が直接に『国語』を読んでいなかったとしても、『国語解刪補』を読んだ可能性があることは否定で

[4] 慶大斯道文庫編『江戸時代書林出版書籍目録集成 2』（井上書房、1963 年 6 月）28 頁参照。
[5] 国文学資料館編『古典籍総合目録第一巻』（岩波書店、1990 年 2 月）331 頁参照。

臺灣大學學術期刊資料庫

きない。なお、中村博保氏の指摘によると、中井履軒の著した歴史書『通語』の第一（保元語）の冒頭に「野史氏曰、詩云……兄弟鬩牆、外禦其侮……」という一節が見られ、『通語』は何らかのかたちで「白峯」の成立に関係していたという[6]。秋成は、あるいは『通語』のこの部分から引用したのかもしれない。それにしても、筆者の推測もあながち全く根拠のない憶測と否定することができないと思われるので、あえて一つの仮説として示しておく。

次に、「牝雞の晨する代を取て代らんに、道を失ふといふべからず。……」という文について検討する。従来の説としては、『書経』周書牧誓篇の「牝雞無晨、牝雞之晨、惟家之索、今商王受、惟婦言是用」によったとするもの、あるいは『保元物語』にある「史記には牝鶏朝する時は、其里必ず亡ぶと云へり」によったとするもの、さらには『書言故事大全』の「妻ノ夫ノ権ヲ奪フヲ謂ヒテ牝雞之晨ト為ス」によったとするもの、などが挙げられる[7]。そのほかに、「牝鶏晨者其家亡」(『たとへづくし』) から引用したとする説も見られる[8]。

ところが、その一方、明の謝肇淛の『五雑俎』巻十五の「事部三」にも、「牝雞之晨家之索也、以三代神聖之開基國祚之悠久、而不足供妹妲褒姒之一敗。」とある。『五雑俎』が『雨月物語』諸篇の有力な典拠であることは、諸先学の研究によってすでに明らかにされ、定説にもなっている。二書の密接な関係と用語の類似性から考えれば、この一条は『書経』その他から引用したとするよりも、『五雑俎』から直接ヒントを得たと考える方が適当なように思われる。

なお、井上泰至氏には『保健大記』を「白峯」の典拠とする説がある。その説の中で井上氏は、「白峯」の論争の中心点となっている

---

[6] 中村博保「『雨月物語』状況的なものと構造的なもの」（『上田秋成の研究』、ぺりかん社、1999 年 4 月、19－33 頁）。
[7] 鵜月洋『雨月物語評釈』（角川書店、1969 年 3 月）57 頁および中村幸彦『上田秋成集』（日本古典文学大系 56、岩波書店、1959 年 7 月）4－7 頁参照。
[8] 中村幸彦ほか編『英草紙　西山物語　雨月物語　春雨物語』（小学館日本古典文学全集 48、1973 年 2 月）282 頁。

臺灣大學學術期刊資料庫

崇徳院と後白河天皇のどちらが正しいか、という命題が『保健大記』にも明確に現れていることや、『保健大記』にある「保元鬩牆の殃を醞釀し」「既に君王居五の初を誤れば、蓋し亦邦……牝鶏晨を司る」の表現と「白峯」の「且詩にもいはざるや、兄弟牆に鬩ぐとも外の侮りを禦げよ」「牝雞の晨する代を取て代らんに」との類似性などを根拠に、『保健大記』を「白峯」のよりどころとし、「白峯」を神儒一致の文脈で読むべきものだ、という結論を下した[9]。氏の「白峯」神儒一致説には異論を挟むつもりはないが、上に示したような表現の類似性を根拠とする典拠説をそのまま受け入れるには躊躇を感じる。少なくとも同氏の上げた表現の類似性は「白峯」と『五雑俎』などのそれと比べれば、『保健大記』の典拠としての存在性が希薄であることが分かる。

それでは、次の一節の原拠は何であろうか。

> されば漢土の書は、経典史策散文にいたるまで、渡さゞるはなきに、かの孟子の書ばかりいまだ日本に来らず。此書を積て来たる船は、必しも暴風にあひて沈没よしをいへり。

これは『五雑俎』巻四「地部十八」の、

> 倭奴亦重儒書、信佛法、凡中国經書皆以重價購之。獨無孟子。云、有携其書往者舟輒覆溺。此亦一奇事也。

によったものとされる。ところが、藤野岩友氏によれば、和刻本（寛文元年、1661 年刊行）の『五雑俎』では、『孟子』を載せた船が必ず覆るという部分は、覆刻の際に削除されたために欠けており、さらに、日本に伝わる経書の中で、『孟子』が忌み嫌われていたことに関する記述は、明・茅之儀の『武備志』にも見られるという[10]。また、西川如見の『町人袋』（1692 年の自序ある）などにも出ているらしい[11]。だとすれば、「白峯」のこの一節は、『五雑俎』によった

---

[9] 井上泰至「「白峯」の王道論とその背景」（『雨月物語論―源泉と主題』、笠間書院、1999 年 4 月、145－151 頁）。
[10] 藤野岩友注釈『五雑俎』（明徳出版社、1972 年 6 月）88－90 頁参照。
[11] 松田修『上田秋成』（図説日本の古典 17、集英社、1981 年）43 頁。

臺灣大學學術期刊資料庫

ことは確実であれば、和刻本の『五雑俎』ではなく、明刊本の『五雑俎』あるいは『町人袋』から引用したとしなければなるまいが、直接『五雑俎』によったというのがおおむねの考え方である。明刊本によったとすれば、おちろんそれを手がかりに秋成の漢文学力について推論することができるのではないかと思われる。

なお、『孟子』を舶載して日本に向かった船が難破する原因として、

> それをいかなる故ぞととふに、我国は天照すおほん神の開闢しろしめしゝより、日嗣の大王絶る事なきを……神風を起こして船を覆し給ふと聞

と説明しているところが、林羅山『本朝神社考』の八幡の条に見られる「続日本紀」二十八の神護景雲３年９月の記事に基づいていることは、後藤丹治氏の『本朝神社考』を中心とする研究によって明らかになっている[12]。『雨月物語』諸話と『五雑俎』の密接な関係、あるいは「白峯」「吉備津の釜」と『本朝神社考』の密接な関係、あるいは「青頭巾」に見られる『五雑俎』の間違った引用などから考えれば、この一節を書くにあたり、秋成は『五雑俎』と『本朝神社考』の両方を参考にしたとするのは妥当であろう。

以上の考察から分かるように、典拠の研究は秋成の漢文の素養あるいは思想の背景を知る重要な手がかりになるが、典拠を特定することは決して容易な作業ではない。用語あるいは文面があらまし対応していても確定的なことが言えないことが往々にしてあるからである。そのような場合の問題解決を図るためには、秋成の全作品をもっと深く掘り下げ、秋成が実際にどのような中国典籍に接していたかという、学問背景の研究が必要となることは言うまでもない。

三、秋成の表現手法

能の構成を背景に秋成の学識が余すところなく披瀝され、その劇的な高まりによって、『雨月物語』諸篇の中の第一の傑作と評される

[12] 後藤丹治「雨月物語と本朝神社考との関係」（日本文学研究資料叢書『秋成』、有精堂、1972 年 3 月、51－55 頁）。

臺灣大學學術期刊資料庫

「白峯」は、「夢応の鯉魚」と並んで三島由紀夫のもっとも愛した『雨月物語』の一篇であったという[13]。一方、中村幸彦氏は「白峯」を解説するに当たり、『雨月物語』の各篇と同じように、能的構成を採ることは中世説話的な贅疣であるが、近世ではやむを得ないことだろう、と述べられ、さらに、秋成は創作過程において、「朧化する為の方法、筋、構成、詞章の美（古典的な美しさ）を重要とし」、「文章の美しさと構成の巧みさがひとしお問題とする」とも指摘されている[14]。そもそも、『雨月物語』は怪異小説としても美文としても定評がある。従来の研究者は、おおむね「白峯」、なかんずくその冒頭の道行文を美文と評価し、『雨月物語』に見られる秋成の文才を褒めるにことばを惜しまなかった。その一方、秋成の作品全体についての批評であるが、文章の形式にこだわりすぎたため変化に乏しい嫌いがある、という見解も見られる。このように、まったく相反する評価が下されているので、ここでは、定評のあるこの書き出しの部分に焦点をすえ、考察を進めたい。

『雨月物語』に見られる文章の構成の形式を、序章のあるものとただちに主題に入るものとの二種類に分けて言えば、本篇は序章を持つ一篇である。名前を伏せておく形で主人公を登場させ、そして舞台の背景が風光明媚の歌枕から陰鬱荒涼たる野山へ移り行くにつれて、話の運びも淡々たる語り口から熱のこもった述べ方へと発展する。しかも、クライマックスを越えたあとは、深山に聞こえる鐘の音のように、読者の心の中にいつまでも余韻を残す――このあたりの描写には、秋成文学の一つの極致が発見できるような気がする。やや長いが、非常に美しい文章だとよく言われるこの書き出しの部分は、『撰集抄』の翻案であるにもかかわらず、秋成の工夫と巧みな筆の運びにより、典拠よりも美しい文章に仕上げられている。

---

[13] 三島由紀夫「雨月物語について」（『上田秋成　怪異雄勁の文学』（別冊現代詩手帖巻の3）思潮社、1972年10月、274頁）。
[14] 中村幸彦『上田秋成集』（日本古典文学大系56、岩波書店、1959年7月）11頁と「上田秋成の物語観」（『近世文芸思潮攷』、岩波書店、1975年2月、283-305頁）を参照されたい。引用文は300頁によった。

臺灣大學學術期刊資料庫

歌枕としての名所の美しい景色は、「白峯」全体のテンポに従いながら、一つ一つの場面の転換とともに、はっきりと読者の目の前に浮かんでくる。ゆっくりとすずろに景色を見て歩いているうちに、読者はいつのまにか、作中の人物とともに中世に戻る。事件はいまにも目の当たりに起きるという迫真感を与えるためか、秋成はまず、冒頭から大自然の景色を大写しで捉える。それから、主人公を登場させ、歴史上の大きな変動と照応しながら、人間の執念を冷静に描いて行く。そこには秋成一流の表現技巧を見て取ることができる。

特に崇徳上皇の荒廃した御陵を訪れるところの描写は、いかにも哀れの情をそそる。かつて一国の君主として天下の神位におられ、栄華富貴を極めた権力者も、一旦島に流され、そして世を去った後は、深山の盛り土に石を三つ畳んでおくという物淋しい墓、しかも荊棘薜蘿などの野草に埋もれた墓の中に眠らなければなかった。西行はもちろん、読者までその荒涼たる光景にいにしえのことを偲び、人生のはかなさを嘆かざるを得まい。上皇の悲運はまさにそのよい例である。

秋成の優れた表現技巧は、この部分の描写により、読者をして、作中の行脚僧らしい人物とともに、千仞の高山を登らせ、新院の御墓の前に佇み、静寂凄然たる雰囲気の中に、生命の重重しさや崇徳上皇の無念さをひしひしと感じさせた。つまり、絶対的な沈黙の中に、読者は西行と一体となって暫く俗界、俗念を離れ、主観の妨げを捨てたかのような澄み切った心持ちで、中世に戻るのである。豪華絢爛たる宮廷生活を頭に描きながら、荒涼たる景色と対面していては、天地の悠遠と人生の短さをしみじみと感じ、涙を流さないではいられない筆触である。『雨月物語』は怪異小説として推賞されているが、怪異小説以上の感動を読者に与えることにその優秀性がある。

臺灣大學學術期刊資料庫

四、主題について

『雨月物語』全体の展開との関連を追究する形で、「白峯」の構成

はよく取り上げられる。ここではまず、諸氏の興味深い見解をいくつか紹介しよう。

（一）田中俊一氏――「憤り」の形象化を基調に『雨月物語』を把握し、「白峯」の主題と発想は怨霊の憤りの形象化にあったと考えられている。怨念形象、信義形象、恨みの形象、嫉妬の形象、修羅の形象、淫獣の形象、鬼畜の形象においての憤りは、『雨月物語』における主題と発想の重要なきっかけとなっている、と氏は見ておられる[15]。

（二）大輪靖宏氏――『雨月物語』はそれぞれ人間のある一面をえがきだしている。前半と後半が対比的な構成になっているが、「白峯」は「恨みを呑んで死んだ人間」の話として展開したものである[16]。

（三）暉峻康隆氏――「封建社会に求められない純トな人間像の追求」という独自のテーマが、雨月の全篇に底流している。その中で、「白峯」「菊花の約」「吉備津の釜」は「不条理な歴史や社会に対する個の抵抗」ないし復讐がテーマである[17]。

（四）浅野三平氏――『雨月物語』全体は信義、愛欲、復讐、その他へ対する執着をモチーフとしているが、「白峯」は復讐に執着する崇徳上皇を描いた作品である[18]。

（五）元田與市氏――「『雨月物語』は「白峯」で、徳川幕藩体制内にうずまく「不可視の脅威」を暗示（予言）し、その実態をつぶさにあばく「貧福論」で閉じる」、という構成になっている[19]。

（六）鵜月洋氏――「白峯」の文学的世界は、「歴史的世界」と

---

[15] 田中俊一「『雨月物語』の世界」（『上田秋成文芸の世界』、桜楓社、1979年5月、19－31頁）。
[16] 大輪靖宏「『雨月物語』に使われた技法」「『雨月物語』の成立と展開」（『上田秋成文学の研究』、笠間書院、1976年1月、167－220頁）。
[17] 暉峻康隆「文人文学の成立」（『江戸市民文学の開花』、至文堂、1967年4月、124－125頁）。
[18] 浅野三平『雨月物語・癇癖談』（新潮社、1979年1月）。
[19] 元田與市「「白峯」―逐われた者と遁れたる者」（『雨月物語の探求』、翰林書房、1995年3月、25頁）。

臺灣大學學術期刊資料庫

「個人の執念」とを、因果律的宿業観によって見事につなぎ合わせるとともに、ひたむきな怨念の恐ろしさと超人的力感を描き出すことによって繰りひろげられている[20]。

（七）金田文雄氏――「白峯」の構想の中心は、物語の最後にことの顛末の結果として置かれた「その後御庙は玉もて雕り、丹青を彩りなして、稜威を崇めたてまつる……御神なりけらし」を逆に発想の契機とすることによって、崇徳院の魔的な神性に据えられ、西行を主人公とした諸国咄的な要素の強いものの構想が大きく転換していった[21]。

（八）高田衛氏――『雨月物語』の配列は「円環的配列構成」である。「白峯」は怨霊とその鎮魂者との意志疎通の不能な様相をかくものである[22]。

（九）木越治氏――『雨月物語』九編はそれぞれ出逢いと別離の物語である。「白峯」の冒頭文「逢坂の関守にゆるされてより」という表現、作者秋成の意識のなかにあった『雨月物語』の開始宣言である。つまり、『雨月物語』における予告された出逢いは予告されたものであるがゆえに真の出逢いたりえていない[23]。

（十）森田喜郎氏――秋成が『雨月物語』で意図したことは、人間と知識の展開であるが、「白峯」は知識重視の物語で、儒教仏教を中心にした知識的言説である[24]。

上に示したのは、主として作品の主題に関する諸氏の見解であるが、なぜ「白峯」を巻頭に飾っているか、その理由についてはあまり触れられていない。一体、『雨月物語』の冒頭に議論を中心内容とする「白峯」を持ってきた秋成の意図はどこにあるのか。

---

[20] 鵜月洋『雨月物語評釈』（角川書店、1969年3月）97頁参照。
[21] 金田文雄「秋成文芸における人間像の形象」（『日本文芸学』第19号、1982年11月）参照。
[22] 高田衛『雨月物語評解』の「解説」（有精堂、1980年9月）24－28頁参照。
[23] 木越治『秋成論』（ペリカン社、1995年5月）322－329頁。
[24] 森田喜郎「上田秋成小説の展開」（『上田秋成小説の研究』、和泉書院、1991年12月、25－30頁）。

臺灣大學術期刊資料庫

前述した『西行はなし歌枕染風呂敷』の近刊予告から推測されるように、以前から西行に関心を持ち、調べもし、最も早い時期にそれが書かれたからという単純な理由からであろうか。それとも、高田衛氏が「白峯」の『雨月物語』全体における特性について論じられているように、「……『雨月物語』の中に循環する死語たちの秩序は、巻頭の「白峰」の世界との連続、重層することばの世界を形成していったからだ。……「貧福論」は意志疎通の対話というパターンの位相で、「白峯」の意志不疎通の対話を喚起する位置の形成を持たねばならなかった。」ということで、つまり、『雨月物語』諸篇に循環的に隣接する関係を保たせ、首尾相応の形にするためにそうしたのであろうか[25]。あるいは、「白峯」を秋成としてきわめて野心的な意図のもとに制作されたものと見ている重友毅氏の見方のように、「白峯」は謡曲松山天狗に習った複式夢幻能的構成になっているが、素材において天下国家の治乱という大問題を取り上げていたし、表現の面においても凝りに凝ったものを示していたので、当然巻頭に位置させるべき作品だからであろうか[26]。日野龍夫氏も「巻頭に置いただけに、秋成としては特に力を込めて書いたものであろう」という見方を示され、「白峯」の『雨月物語』九篇における位置とその意味の大きさを仄めかされている[27]。

日本歴史上の大動乱を取り上げたこの物語は、怪談性、伝奇性よりも、歴史知識性のほうが大きい比重を占めている。津田左右吉氏はかつて、「白峯の一篇の如きも、たゞ撰集抄と保元物語との記載をとつて補綴潤色したに過ぎないものであつて、そこに何等の新解釋も施されてゐないではないか。放伐論に對する批評の挿まれてゐるのは目新しい感じがせられるけれども、それは偶然のことである。そのためにこの一篇を書いたのでないことは、一方に儒教的政治思

[25] 高田衛「幻語の構造」(『上田秋成　怪異雄勁の文学』、別冊現代詩手帖巻の 3、思潮社、1972 年 10 月、44 頁)。
[26] 重友毅『秋成の研究』(文理書院、1971 年 5 月) 309－328 頁、376－400 頁を参照。
[27] 日野龍夫「総説」(『雨月物語』、ほるぷ出版、1986 年 9 月) 18 頁。

臺灣大學學術期刊資料庫

想を説いてゐるため、其の主旨が徹底してゐないことによつて知られるのみならず、全體の書きかたの上から見てもそれは明である。だからこの作は、作者にも作者の時代にも特殊の關係のない遊戯文字である。」と「白峯」における放伐論への批評の挿入に新鮮さを認めながらもその批評が徹底していないことを指摘し、「白峯」をかなり苛酷に批判されている[28]。もっとも津田氏のこの意見に対し、重友毅氏は反論を展開されている[29]。これに関する検討は次節に譲り、ここでは日本歴史上の大動乱を取り扱う「白峯」を『雨月物語』の巻頭に据えたことについて、私見を述べてみたい。

思うに、秋成が『雨月物語』を創作するにあたり、歴史書はもちろんのこと、和漢典籍ないし文学作品も数多く参考にしたはずである。そして、『雨月物語』と前後して世に問うた綾足の『本朝水滸伝』も、日本歴史上の大事件の一つである道鏡事件を素材とした読本である。両作品とも王権皇制をめぐる皇室と権臣の争いによる内乱のきっかけとその経緯を描いた作品であるが、綾足は歴史を覆し、まったくの虚構で『本朝水滸伝』を構成したのに反し、秋成は「むかし此頃の事どもも人に欺かれしを、我又いつはりとしらで人をあざむく、よしやよし、寓ごとかたりつゞけて、ふみとおしいたゞかする人もあればとて、物いひつゞくれば、猶春さめはふるふる。」と『春雨物語』の序にも書いているように、寓意をもって創作する態度を見せながらも、史実と伝聞をもとに「白峯」を書き上げた。秋成はあるいは、綾足の『西山物語』乃至は『本朝水滸伝』に見られる綾足の史実を取り扱う態度に反発を覚え、史実に忠実である自分の創作姿勢を強く打ち出し、綾足に対抗する意図で、「白峯」を巻頭においたのかも知れない。事実はどうだったか筆者には断言できないが、そうとも考えられる手がかりもないではない。源太騒動を作品化するときの秋成の創作態度がそれである。

---

[28] 津田左右吉『文学に現はれたる国民思想の研究第四巻』（岩波書店、1970 年 3 月）149 頁。
[29] 注 26 所掲書参照。

臺灣大學學術期刊資料庫

源太騒動の張本人である渡辺源太から直接事件の真相を聞き、『西山物語』における事件の取り扱い方が事実とあまりにも開きが大きかったことを知った秋成は激怒し、それで、『ますらを物語』を書き、さらにそれに基づいて『春雨物語』の「死首のゑがほ」を書いたことはよく知られている[30]。史実と想像力に基づいて書かれた「白峯」は、短篇ではあるが、綾足の長篇の歴史小説『本朝水滸伝』と張り合う意味で、『雨月物語』のきわめて重要なモチーフの一つであることを表明しようとし、それを巻頭に据えたと考えるのはあながち無理でもなかろう。

『雨月物語』のみでなく、晩年の『春雨物語』の第一話も史書に基づいて書かれたものである。『本朝水滸伝』前篇の刊記に安永 2 年（1773 年）という朱印が押されており、安永 5 年刊行と思われる『雨月物語』より早く世に問うたので、「白峯」の定稿が出来る前に、秋成が『本朝水滸伝』の一部分を読んだ可能性がある。ただし、もし『雨月物語』の定稿が出来たのは序文に示した「明和五年」だとすれば、上のような推定は成り立たなくなる。しかし、『本朝水滸伝』が板刻以前に知人の間で回覧されていたこと[31]、『続日本紀』神護景雲 3 年の八幡神社の記事が両作品のどちらに於いても重要な役割を果たしていること[32]、『本朝水滸伝』前篇に付されている藤原朝臣加禰与という人が明和 10 年に書いた序文によれば、『本朝水滸伝』は明和 8 年にすでにできたことなどを手がかりに考合わせれば、秋成が綾足への対抗意識から、わざわざ歴史事件を素材とした「白峯」を『雨月物語』の第一話に位置させたと考えるのは、決してまったく根拠のないことではない。

上に述べた筆者の推定のほかに、違う観点からその理由を考える

---

[30] 大曽根章介ほか編『研究資料日本古典文学四　近世小説』（明治書院、1983 年 10 月）217 頁参照。
[31] 建部綾足著作刊行会編『建部綾足全集』（国書刊行会、1986ー1990 年）第 9 巻所収綾足書簡一四九番の下郷学海宛のものによる。
[32]『本朝水滸伝』の「我国は天照すおほん神の開闢しろしめ」（42 頁）云々の部分のよりどころについては、注 12 所掲の後藤丹治氏の論文を参照されたい。

臺灣大學學術期刊資料庫

こともできる。作品の背景を過去の時代に設定し、素材を史実伝説に求めるのは、「読本」の大きな特徴である。秋成の師で「読本」の鼻祖でもある都賀庭鐘の書いた「読本」第一作『英草紙』の第一話「後醍醐の帝三たび藤房の諫めを折く話」も、歴史風のもので、度過ぎた仏教信仰の害を説いたものであることは注目に値する。仏教の僧侶が「未来解脱の利慾を願ふ心より」出家し、「人道をもて因果に引入れ」、お説教で人の心をまどわすこと、そしてそれ以上に儒学の論理は政治に支障をもたらすと説く論旨も、帝あるいはその臣下と議論を交わすという構成も、「白峯」とは明らかに一脈相通じるところがある。この点に着目すれば、秋成の創作活動はその師である都賀庭鐘の創作活動の延長線上にあるとよく言われているように、「白峯」のような議論形式で知識性が中心となる作品を巻頭に掲げたのは、結局『英草紙』の構成の追随に過ぎないとも考えられる。

以上述べたことを整理すれば、次のようなことになろう。「白峯」の創作においては、師の都賀庭鐘への追随、建部綾足への対抗意識、当時流行した『水滸伝』の影響、自分の思想の披露などが大きな要因となり、それで、史実と伝承と想像力の結合物であるこの作品が巻頭に置かれる結果になったと考えるのがいちばん妥当である。『雨月物語』は色々な点で、庭鐘の翻案作品からも、当時流行していた『水滸伝』からも、大きな影響を受けた。上梓したあと、怪異小説として人気を博した『雨月物語』ではあるが、刊行されるまでは書肆も作者も、売れ行きをよくするためにいろいろ工夫し、苦労したにちがいない。秋成は儒教仏説を批判するために「白峯」を書いたのではない。当時では、歴史小説のほうが怪談物より人気があったので、水滸物に見られる史実性と都賀庭鐘の「英草紙」の構成法を取り入れ、史伝を中心に議論の形を採る「後醍醐の帝三たび藤房の諫めを折く話」と極めて性質の近い「白峯」を書き、主として綾足への対抗意識から、それを『雨月物語』の第一篇に据えた、とするのが筆者の見方である。その是非はともかく、一つの仮説として示し、今後の考察に俟ちたい。

臺灣大學學術期刊資料庫

五、作品に反映した秋成の思想

「白峯」についてよく取り上げられるのは、典拠、表現の美および作品に反映した秋成の思想である。表現の美についてはすでに定評があり、議論の形式を明確に採っており、知識的要素の濃いものという評価についても異論はないようである。典拠もほとんど明らかにされた観がある。思想あるいは文芸観については、中村幸彦氏の詳しい考察により、かなりの研究成果が収められている。それ以来、「白峯」の研究は、秋成の歴史観、国家観、ないし儒教・仏教への批判という観点から展開されてきた[33]。秋成の歴史観、宗教観などを考察する場合、この作品はいろいろな手がかりを提供してくれる。

まず次の一節を見てみよう。

周の創、武王一たび怒りて天下の民を安くす、臣として君を弑すといふべからず、仁を賊み義を賊む、一夫の紂を誅するなり。

これはもちろん、『孟子』「梁恵王篇」の「武王一怒而安天下之民」と「賊仁者謂之賊、賊義者謂之残、残賊之人謂之一夫、聞誅一夫紂矣、未聞弑君也。」というところからとったものである。すでに本章の第二節で触れたことであるが、『孟子』を舶載した船は日本に来る途中で必ず難破するという言及あるいは上皇、西行の皇位をめぐる論争などの内容を根拠に、「白峯」は禅譲思想、簒立説をめぐって秋成が自分の史観を打ち出したもの、あるいは秋成の儒教放伐論（＝国家観）を打ち出したもの、あるいは秋成の儒仏排斥説を打ち出したものといろいろな見方が出されている。たとえば、中村幸彦氏は「秋成は神社考の神道を王道に、人道を儒教にした」と指摘されると同時に、「論の中心は、西行の難ずる儒教の簒奪革命説と、院の難ずる仏教の因果逃避の説であるが、秋成の立場は、国意考などに見

[33] 中村幸彦『上田秋成集』（日本古典文学大系 56、岩波書店、1968 年 10 月）11 頁参照。

臺灣大學學術期刊資料庫

える真淵の説である。」とも述べられている[34]。鵜月洋氏も中村幸彦氏の説を受け入れ、秋成の「白峯」創作のモチーフを物語的史観の披瀝とし、秋成の抱懐する国家観なり史観なりは、儒教仏説に対する批判がまとまった形で記された『国意考』によって導き出された国学観的な思想（＝近世に起きた国学思想）である、と断定されている[35]。つまり、保元の乱を一つの例としてその是非を問いただす崇徳上皇と西行の議論の要旨は、日本の歴史事件を踏まえ、日本古代精神の素朴な本質と中国から伝入した儒教の善し悪しとを「王道」において見ようとする秋成の国学思想そのものの披露である。そして、儒教と仏教が日本に伝來してから、日本古来の固有思想は悪い影響を受け、混乱状態に陥ってしまい、そのために皇位をめぐる争い、女帝の践祚、后妃の政治干渉――いわゆる「牝鶏司晨」の現象――が絶えずに起こっているという指摘とそれに対する批判は、作者秋成の国学的思想の現われで、賀茂真淵の「国意考」に由来したものだというのである。

このような見方は、中村幸彦氏を始め、多くの先学の著述に見られ、定説となっている観がある。そのためか、今日でもほとんどの研究者は、この作品を秋成の国家観、史観をもっとも明確に表したもの、日本古来の神国論と中国の儒教の善し悪しを論じながら、孟子の易姓革命を批判するものと認め、その中から秋成の儒教放伐論、秋成の儒仏二教批判論ないし国粋思想を見出そうとした傾向が見られる。

たしかに幕府崩解期から昭和前半期にかけて、多くの知識人が中国に偏見を持っていた。西洋兵学を学んで、「東洋の道徳、西洋の芸術」を説き、京都で尊攘派に暗殺された佐久間象山（1811－1864）も、蘭学を勉強し、三回も欧米を外遊したことのある名高い思想家、教育者、評論者である福沢諭吉（1834－1901）も儒教の害を力説した。個人の境遇と時代の背景を考えれば、理解できないことではな

[34] 注 33 に同じ。
[35] 鵜月洋『雨月物語評釈』（角川書店、1969 年 3 月）68－72 頁。

臺灣大學學術期刊資料庫

かろう。なお、藩校で儒学を学び、その後オランダに留学し、西洋近代学問を身につけて帰国した西周（1828－1897）は『百一新論』（二巻、明治七年）の中で、儒学には学ぶべきところもあるが、個人の倫理と社会の倫理を混同するような考え方は学ぶに値しないとしたのも、時代の成り行きだから止むを得ないことであろう。さらに、平等主義の立場から武家政治の秩序を支える儒学や仏教などを否定し、儒学の廃棄まで主張した安藤昌益（1703－1762）、あるいは『西学概論』という本の中で中国文化の長所を完全に否定すると同時に儒学を攻撃し、西洋の学問こそ学ぶべき対象だとした国学者平田篤胤（1776－1843）など、口頭や筆先で儒家思想を攻撃したり、中華文化を非難したりした国学者が近世にすでにかなりいたことは、周知のとおりである。『雨月物語』を国学者秋成の儒教と仏教を排斥する思想を具現したものと見なす秋成論が有力であるのは、当然といえるかもしれない。

ところが、「国学一辺倒」という傾向のある中で、まったく違う意見を唱える研究者もないではない。例えば、勝倉寿一氏と鷲山樹心氏の論述である。勝倉氏は『安安言』『胆大小心録』『冠辞続貂』『茶痕酔言』などを手がかりに、秋成の国学思想、文芸思想に中国の優越性と日本の独立性を比較、検討する視点が存在していることを指摘されている[36]。鷲山樹心氏は通説になっている「国学一辺倒」的な読み方の偏よりを指摘したうえ、秋成の思想の本質を見極めるべく、仏教の奥意に対する深い理解と作品の精読により、秋成の思想観を捉えようとされた[37]。以下、いくつかの違った論説を踏まえ、従来の説と照らし合わせながら、「白峯」に反映したいわゆる秋成の儒教放伐論について、筆者なりに検討を加えてみる。

ところで、秋成が参考にした『本朝神社考』の作者林羅山の持論は神儒一致説である。秋成はしたがって『本朝神社考』巻五「厩戸

[36] 勝倉寿一「秋成の学問観と創作」（『上田秋成の古典学と文芸に関する研究』、風間書房、1994年12月、423頁）。
[37] 鷲山樹心『上田秋成の文芸的境界』（和泉書院、1983年10月）120－201頁。

臺灣大學學術期刊資料庫

皇子の項」に見られる「教之以悌、勧之以忠誠、則神道人道豈其二哉」という羅山の思想から影響を受けた可能性がある。この点に着目した後藤丹治氏は、秋成は神道も人道も同じだとしている、という説を唱えられた[38]。これに対し、勝倉寿一氏は、秋成がすべての道理の起源を中国に求める儒学者の中国一辺倒、国学者の中国批判の偏向性を批判していることに注目し、

> 『和名抄』から古代語を想定し古代観に結合させる国学の方法に対して、『和名抄』には中古の誤りが混在するとする指摘、唐制を典拠とした飛鳥浄御原令を規範として神代の服制を想定する有職故実の学への批判に、中国の影響を排した純粋古代の解明を説く国学者の資料操作の誤りや、論理の矛盾の指摘も含まれる。

という鋭い見方を提示されている[39]。同じく注目すべき論文は、鷲山樹心氏の「『雨月物語』の儒・仏二教観」である[40]。同氏は秋成の『遠駝延五登』に見られる「人の心を善に揉る道なればよし……」の言辞や「白峯」の中で西行が仁徳天皇兄弟が皇位を譲り合うという歴史的事件を挙げ、これこそ真の儒教の精神であると発言したくだりをその裏づけとして、秋成には儒教を肯定する姿勢があると述べられ、『国意考』に見られる真淵の「かえすがえす、儒の道こそ、其国をみだすのみ」などの言説と比較したうえで、「白峯」における秋成の立場は、『国意考』の真淵説とは違い、儒教の本質に悖る禅位簒立の思想的影響を批判する秋成独自の思想の現れであると指摘されている。鷲山氏が言われたように、秋成は西行の口を借りて、『孟子』を舶載した船が日本に向かう途中でかならず難破することを言わせ、その易姓革命説を批判しているというふうに読み取ることは確かにできるが、仁徳天皇兄弟の話を例に語ったときは、儒教を肯

---

[38] 後藤丹治氏「雨月物語と本朝神社考との関係」(日本古典文学資料叢書『秋成』、有精堂、1972 年 3 月、51－55 頁)。
[39] 勝倉寿一「秋成の学問観と創作」(『上田秋成の古典学と文芸に関する研究』、風間書房、1994 年 12 月、423 頁)。
[40] 鷲山樹心『上田秋成の文芸的境界』(和泉書院、1983 年 10 月、189－194 頁)。

臺灣大學學術期刊資料庫

定したように読み取れることも否定できない。

鷲山氏が挙げた例のほかに、

> 国学者が唐の事を云と、儒者が日本の事を考えへたと、同病憐むべし。
>
> 『胆大小心録』異文三
>
> 皇国ノ学士、西土之教道ニ淫シ、万理悉皆彼出ルト思ヘルハ無識ナリ。然ドモ彼ニ得タル所有有リ。此ニ長セル事有リ。幸ヒニ通交シテ、言語相知リ、物物交易スルハ、皇祖諸神ノ恩霊トモ思安スベキ歟。
>
> 『安安言』
>
> 言語、服制、飲食、国ごとに異なるは、おのおの開国よりのならはし也。我にたがふをいやしむるは俗情也。かれにかなはぬとて､我をおとしめ物云は愚学也｡いづれにもまどふべからず。
>
> 『冠辞続貂』二
>
> 儒仏の二教も土地にふさはずば､培養するとも生育すべからず。
>
> 『呵刈葭』

なども見られる。

そのほかに、坂東健雄氏は、西行と崇徳院の王道論争はうまくかみ合っていないことで、西行と崇徳院の王道論争の動機、あるいは西行が院を説得できないことについて、上田家相続にあたっての作家秋成の、養家の姉に対する負い目に近いものがあっただろうと考え、西行＝秋成、新院＝秋成の養父という関係式を設定し、「白峯」の議論を秋成内部の養父に語られずに終わった論理として説かれている[41]。実子の姉がいるのに、養子の秋成が勘当された姉の代わりに上田家の後継ぎにさせてもらった経緯からヒントを得たのかもしれないとする同氏の見解はかなり異色的で面白いのであるが、秋成の生い立ちにこだわり過ぎるように思われる。

---

[41] 坂東健雄「「白峯」あるいは父性呪縛の構図」(『上田秋成『雨月物語』論』、和泉書院、1999 年 6 月、1－52 頁)。

臺灣大學學術期刊資料庫

なお、「西行の立論の歯切れの悪さも、結局のところ、彼の肯定する《尭舜の道》の禅譲思想が、その裏に簒立思想を導き出すような論理性をふくんでいるからに他なるまい。」とする坂東氏の指摘は肯綮にあたると思われる。

近世に入って盛んになった「国学」に長年親んできた秋成の晩年の作品に儒仏二教に関する言説が見られることは、別に異とする必要はないが、中国通俗小説を耽読し、それから深い影響を受けた秋成は、『雨月物語』を創作する過程の中で、はたして儒仏を全面的に批判する姿勢をとっていたのだろうか。以下、従来の諸説を参考にしながら、「白峯」に反映したとされる秋成の儒教放伐論あるいは儒仏排斥論について再検討を加えてみる。

秋成の文学観について、中村幸彦氏はかつて次のように要約できる指摘をなされたことがある。

> 恐らくその人間観に根ざすことであろうが、秋成の作中人物は、絶対的な善人も悪人もなく、みんなそれぞれ性には善となるべき種があるが、違った本能があるから、社会の習いに背いて行動することもあるように描かれている。秋成は勧善懲悪論を否定し、文学は「本質的に性情の表出である」と説きながらも、「朱子学的勧懲論と史書古典を鑑とする儒者的古典観から脱しない」先人の説を受け、同じようなことを「ぬば玉の巻」において論じている。「秋成は文学は読み方によって勧懲の具となり得るともいいながら文学と道の別をつらぬいた」が、その「文学観の発表が十分な燃焼なくして試みられたために、矛盾と思われ誤解されやすい部分が多」く、「正史といえども時に事実を曲げることがあるから、自分も自分の判断を加えて作品化してよかろう」と考えている。

要するに、中村氏の指摘によれば、秋成はその生涯を通じて寓意説でもって創作に臨んだという[42]。しかし、「白峯」に寓意が込めら

[42] 中村幸彦「読本初期の小説観」と「上田秋成の物語観」(『近世文芸思潮攷』、

臺灣大學學術期刊資料庫

れているという主張には反対しないが、作中における西行の論理の矛盾と中途半端さをもとに、儒教放伐論あるいは儒仏排斥論を持ち出すのは賛成しかねる。第一、孟子云々のところは、単に孟子の説く平民革命説を批判しているにすぎないと見ることができる。孟子の説は儒教の説にちがいないが、平民革命説を否定したからといって、儒教の全てを否定したことにはならない。まして、「此兄弟の王の御心ぞ、即漢土の聖の御心ともいふべし」、あるいは「詩にもいはざるや」とあるように、儒教が神国日本に合わないことを述べる一方、儒教の教えの良い例を挙げ、尭舜の道を肯定している。

「白峯」は真淵の『国意考』の影響によって成立したもので、「宗教や道徳に歪曲される以前の人間性情の率直な表現、そこにこそひたぶる直く雄雄しい人間がおり、真実があるとする真淵」の『国意考』は、道教の教主老子の「天下は神器なり」ということばを肯定した向きがあるとするのが通説になっているようである[43]。つまり、道教と神道は一脈相通ずるところがあるというのである。なお、神仏習合という日本独特の宗教構造、文化特質が八世紀から見られ、神道の中に仏教の宗教意識も入っていることは否定できないことである[44]。国学者として秋成が外来文化である儒教仏説をあげつらうことは、自分の思想を止揚する過程においては、ごく自然なことであろう。「白峯」に見られるいわゆる儒仏論が中途半端に終わったのは、つまるところ、中日両国の思想にはそれぞれ長所と短所があり、それを正しく認識しなければならないと主張することによって、儒学者の中国一辺倒さらには国学者の中国批判の偏向性を批判したかったからではないか、そこには「国学者であるよりも、人間であることを心がけた人物であった」秋成[45]の儒教的思惟法も顔を覗かせ

岩波書店、1975 年 2 月、252－282 頁、283－305 頁）参照。
[43] 鵜月洋氏は中村幸彦氏の説を引いて解説されている。鵜月洋『雨月物語評釈』（角川書店、1969 年 3 月）69－72 頁参照。
[44] 神仏習合に関する詳しい解説は、義江彰夫氏の『神仏習合』（岩波新書 453、岩波書店、1996 年 7 月）を参照されたい。
[45] 注 42 所掲書 292 頁による。

臺灣大學學術期刊資料庫

ている、とするのは偏見であろうか。

六、終わりに

これまで述べたことから分かるように、「白峯」は秋成が儒教放伐論を打ち出し、孟子の易姓革命説を痛烈に批判したものと見なされるのが普通である。しかし、このような見方は是認し難いものである。秋成は「白峯」中で徹底的に儒教と仏教を批判しているわけではない。それはなぜか。秋成の思想そのものが儒教思想から大きな影響を受けていたという理由による。秋成は、世間の善悪、正邪、美醜は悉く各人の主観的判断によるもので、絶対的な道徳的価値は存在しないという考え方を持っているからでもあろう。「蛇性の婬」における法海和尚の法力に関する描写、「青頭巾」に見られる「禅師の大徳雲の裏海の外にも聞えて……」という禅師を称える描写、「吉備津の釜」に見られる神官が神占(＝神意)を無視したという設定、さらに晩年の秋成が儒教と仏教に言及するとき、その長所と短所をそれぞれ認めていることなどを考え合わせると、秋成はどの宗教に対しても同じ態度を採っていたと思われる。まして、中国の小説、典籍に心酔していた『雨月物語』の創作期に、儒教あるいは佛教を全面的に排斥する姿勢を採るとはとても考えられない。

田中優子氏も、「秋成が一貫して書いているのは、儒教や仏教の批判であるよりむしろ、それら既製の意味体系を借りてでも、自らの生と、自らの生きる世界とに、意味と価値を探し出そうとする人間というものの姿」で、秋成の書いた「物語は我々に答を与えないことになる。事件は問題を提起したまま、歴史の彼方に送り返されるのである」、という意見を示されている[46]。まさにその通りで、秋成は問題を出しても答えは出さず、すべて読者の判断に任せているのである。秋成は、生霊の登場、物語の筋立て、構成などを利用したのみならず、『源氏物語』以来の朧化法も取り入れ、歴史上の大事件

[46] 田中優子「雨月物語と春雨物語」(日本文学協会『日本文学講座 5 物語・小説 Ⅱ』、大修館、1987 年 6 月、68－74 頁) 参照。

臺灣大學學術期刊資料庫

の是非を議論の形式で取り上げた「白峯」ないし『雨月物語』を書いた。

木越治氏の指摘によると、「仏法僧」の、玉川の水をめぐって紹巴の口を借りて語られた内容の部分は、「当然感じていい疑問も持たずに、無批判に大師に関する伝承を受け入れてきた人々のあり方を批判の対象としている。」[47]。「白峯」において、秋成が批判しようとしたのも儒教あるいは仏教ではなく、無分別に儒教や仏教を受け入れた、あるいは排斥した傾向ではないか。筆者にはそう思えてならない。

儒学的思想の代弁者である崇徳上皇は、結局、世間の俗念から逃れられなかったのに対し、仏教的思想を代表する西行法師は、俗世間から脱出した者の代弁者である。どちらも神道思想を代表する人物ではなく、一方は儒学、一方は仏説という、立場が対蹠的になっている二人の口を借りて議論させる設定は、決して日本の国粋思想と外来思想の対決を示すためのものではない。「若き秋成にとっての真淵思想との出逢いが、決して排外的な国粋思想との出逢いではなく、 むしろ和漢の古典伝統を背景にした「生」なるものの自覚と、詩心の目ざめへの触発としての出逢いであった」、という高田衛氏の指摘[48]をもって、拙論を閉じることにする。

[47] 木越治氏『秋成論』（ぺりかん社、1995 年 5 月）371 頁。
[48] 高田衛「『雨月物語』の世界」（諏訪春雄・日野龍夫編『江戸文学と中国』、毎日新聞社、1977 年 2 月、152 頁）。

臺灣大學學術期刊資料庫

参考文献

浅野三平（1979）『雨月物語・癇癖談』新潮社
坂東健雄（1999）『上田秋成『雨月物語』論』和泉書院
藤野岩友注釈（1999）『五雑俎』明徳出版社
後藤丹治（1972）「雨月物語と本朝神社考との関係」『秋成』有精堂
日野龍夫（1986）『雨月物語』の「総説」ほるぷ出版社
井上泰至（1999）『雨月物語論―源泉と主題』笠間書院
勝倉寿一（1994）『上田秋成の古典学と文芸に関する研究』風間書房
慶大斯道文庫編（1963）『江戸時代書林出版書籍目録集成 ２』井上書房
木越治（1995）『秋成論』ぺりかん社
国文学資料館編（1990）『古典籍総合目録第一巻』岩波書店
松田修（1981）『上田秋成』（図説日本の古典 17）集英社
三島由紀夫（1972）「雨月物語について」『上田秋成　怪異雄勁の文学』思潮社
森田喜郎（1991）「上田秋成小説の展開」『上田秋成小説の研究』和泉書院
元田與市（1995）「「白峯」―逐われた者と遁れたる者」『雨月物　語の探求』翰林書房
中村博保（1999）『上田秋成の研究』ぺりかん社
中村幸彦（1975）『近世文芸思潮攷』岩波書店
中村幸彦ほか編（1973）『英草紙　西山物語　雨月物語　春雨物語』（日本古典文学全集４８）小学館
中村幸彦編（1968）『上田秋成集』（日本古典文学大系 56、岩波書店
大輪靖宏（1976）『上田秋成文学の研究』笠間書院
大曽根章介ほか編（1983）『研究資料日本古典文学四 近世小説』明治書院
重友毅（1971）『秋成の研究』文理書院
重友毅（1938）「翻訳翻案文学としての近世小説ー特に怪談ものを中心としてー」『国語と国文学』15―4

臺灣大學學術期刊資料庫

諏訪春雄・日野龍夫編（1977）『江戸文学と中国』、毎日新聞社
高田衛（1972）「幻語の構造」『上田秋成　怪異雄勁の文学』思潮社
建部綾足著作刊行会編（1986ー1990）『建部綾足全集』第 9 巻国書刊行会
田中俊一（1979）『上田秋成文芸の世界』桜楓社
田中優子（1987）「雨月物語と春雨物語」日本文学協会編『日本文学講座　5 物語・小説 Ⅱ』大修館
暉峻康隆（1967）「文人文学の成立」『江戸市民文学の開花』至文堂
津田左右吉（1970）『文学に現はれたる国民思想の研究第四巻』岩波書店
鵜月洋（1969）『雨月物語評釈』角川書店
鷲山樹心（1983）『上田秋成の文芸的境界』和泉書院
義江彰夫（1996）『神仏習合』岩波書店

臺灣大學學術期刊資料庫